



- 中国の大学・学生事情
- 中華人民共和国教育部寄贈図書の贈与式
- 海外研修を終えて
- 朝陽門外の虹：門も塀も取り払って
- Q&A 質問コーナー
- 付録：桜美林大学図書館案内

中国の大学・学生事情

経済学部教授 石 井 敏



昨年の9月から12月にかけて3ヶ月間、北京師範大学経済学院の大学院でマクロ経済学を講義（英語）してきました。その前後を含めた4ヶ月間の中国滞在の経験をもとに、中国の大学と学生についてお話しします。

北京師範大学は中国のトップ・レベルの大学の一つです。日本で言えば筑波大学あるいはそれ以上に格付けされている大学です。学生総数2万人弱で広いキャンパスをもっており、キャンパス内には食堂はもとより、スーパー、郵便局、診療所、ホテルまであります。まるで小さな町です。それでも北京大学や清華大学に比べると、キャンパスの規模、施設の質、その他様々な教育研究条件面で大きな開きがあります。このような大学と桜美林大学を対比することにはもともと無理がありますが、参考のために一面をご紹介します。

少数の北京出身の学生を除いて学生の大部分が地方出身で、彼らはほとんど全て学生寮に住んでいます。学生寮は4人部屋から8人部屋で、部屋には机もなく、私物を置くスペースも限られています。もちろんテレビも冷蔵庫もありません。女子学生でもヘアードライヤーを持つている人は少なく、携帯電話やノート・パソコンを持っている人はごく少数です。寮にはプライバシー空間がほとんどなく、勉強は図書館か空き教室でするしかありません。

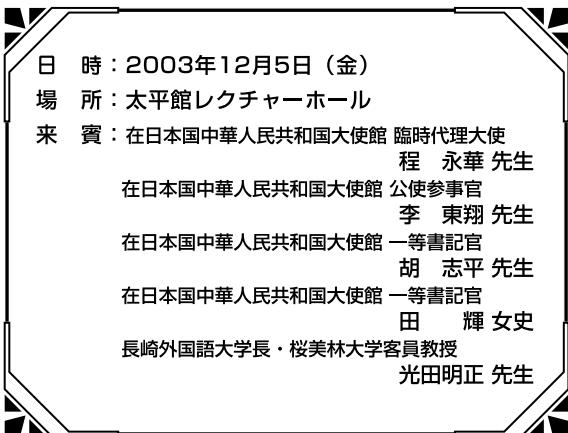
北京師範大学の図書館の規模は桜美林大学図書館の6倍程度です。蔵書数、閲覧席ともに桜美林大学と比べようもありませんが、このクラスの大

学図書館としてはまだまだ不十分です。とくに外国書籍、視聴覚メディアの面が立ち後れています。主として予算面の制約によるものと思われます。図書館は遅くまで開館していますがつねに満席状態で、とくにパソコン室は150席程度しかないために順番待ちで時間制限されています。中国でもパソコンとインターネットが急速に普及していますが、学生個人がパソコンを持ち、インターネットに接続してウェブ・サーフィンを楽しむ段階には達していません。北京の一般市民の年収が50万円以下（地方ではその半分以下）であることを考えれば、それが経済的に困難なことは容易に推量できます。

北京師範大学の学生はよく勉強します。図書館はもちろん、空き教室で夜の10時過ぎになって多くの学生が熱心に勉強しています。公園のベンチで熱心に本を読み、英会話練習している学生を多く見かけます。中国の大学生は同年齢層の10%程度と少ないにもかかわらず、雇用機会が相対的に乏しいため、大学でよい成績を取らなければ良い就職ができないのですから必死です。もう一つの理由は、中国は労働力過剰のために、アルバイトをしたくてもアルバイト先がないことです。金がないから携帯、パソコンも買えません。金のかかる遊びもできません。余暇は友達と話をするか本を読むしかないので。

これからの日本は、このような状況にある中国と競争し、協調していくなければなりません。日本の学生もうかうかしていられないのです。

中華人民共和国教育部寄贈図書の贈与式が行われました



寄贈された図書の前で記念撮影

桜美林大学は、中日友好プログラムの一環として長崎外国语大学に続き中華人民共和国教育部から中国の書籍約1,200冊の贈与を受けました。贈与式ではまず佐藤学長より長崎外国语大学長の光田先生の強いお勧めで実現した経緯が紹介されました。また昨年出版された山崎朋子氏の『朝陽門外の虹』に触れ、「桜美林のルーツは北京にあるので大変うれしく思っています。寄贈いただいた図書を中心に、桜美林大学図書館の特色となるような形に育てていきたい」とお話されました。（『朝陽門外の虹』には桜美林のルーツである北京に創立された崇貞学園について、またその創立者たちの活動が詳細に書かれています。）続いて、臨時代理大使程永華先生から佐藤学長に図書目録が手渡され、桜美林大学からは感謝状をお送りしました。また、学生教職員が集う中、程永華先生から中国語を交えてスピーチをいただきました。

在日本国中華人民共和国大使館 臨時代理大使 程 永華先生のスピーチ

私は程永華です。今大使が一時帰国をしているので、臨時代理大使を務めています。皆さんとお会いして、また中国教育部、中国大使館を代表して図書の贈呈をすることを大変うれしく思います。この図書を贈呈した主旨は、桜美林大学は中国と長い間交流の良い伝統を持っています。また、桜美林大学には多くの中国事情を研究する先生方また学生方がいます。皆さんの研究活動の助けになればと期待をして贈呈しました。

中国と日本は二千年にわたる友好交流の歴史があります。また、地理的にも近い隣国です。この要素は、国家間関係がどう変わろうともこれが変わることはありません。中国と日本の関係は、二千年の間いろいろとありました。この30年間国交正常化が実現され31年、目覚しい発展をしました。例えば、1972年の中日両国間の人的往来の総数は一万人足らずでした。それが昨年には360万人になりました。日本から中国に300万近くの人が行き、中国からも5、60万の人が日本に来ました。貿易額も31年前は10億ドルだったのが昨年は1,019億ドルになりました。今年は更に大きな伸びがあり1,200億ドルを超えるのは間違いないと見込んでいます。この他に文化、スポーツの交流があります。各層各分野の交流が進められて広く深くなりつつあります。

しかし、それと同時に問題がないわけではありません。時々トラブルも生じます。それをひとつひとつ解決して乗り越えて更に両国関係の発展を遂げなければなりません。私たちはそのように考えて自分たちの仕事を進めております。両国間の友好協力関係を進めるためには、その基本となるのは国民レベルの交流、人ととの交流が基本です。交流があつて相互理解が深まり、相互理解が深まって初めて相互信頼が深まると私は信じています。交流を行うためには、相手国の文化、政治、経済、社会の事情を知り、またその言葉が分かるということが大事であると思います。

学生の皆さんがまず中国の文化に興味を覚えて、また、言葉を勉強し中国から贈呈しました本を使って、またそれを通じて中国の皆さんとも交流できるように願っております。かつて私はこういう言葉を聞いたことがあります。「ひとつの外国语を習えば、自分にとってはひとつの鍵が手中に握られたのと同じである。」つまり、この鍵を持って自分の人生、将来に新しい扉を開けることができるかもしれません。皆さんのが中国語を学習され、また中国文化を研究されて積極的に交流を行い、中国と日本の友好関係のために大きく貢献されるように期待しています。

簡単ながら桜美林大学と中国の関係がますます活発になり発展されますように、とお祈りして挨拶をいたします。

海外研修を終えて

整理係 濱 一 枝

私立大学図書館協会国際図書館協力委員会主催の海外研修が、初めて公募の形で実施され、全国約500校の私大の中より8名の参加が認められた。2003年10月26日より11月1日迄の期間、アメリカの西部地区で先駆的役割を果たしているUC Berkeley, Research Libraries Group, Stanford University, California Digital Libraryの4つの機関において研修が行われた。アメリカにおいてLibrarianの社会的地位は専門家として確立しており、分野別の図書館に夫々配属される。BerkeleyやStanfordでも20を超える専門図書館を持っており、職業的には教員になるより難しい状況である。



UC Berkeley の Moffitt Library 内部

出発前に各参加者より出された英文の質問をまとめたもの約20項目が各機関にメールで出された。主の内容としてE-journal, E-book, E-mailレファレンスの利用状況、Workshopの運営、予算の効率化、資料共有化などが挙げられる。デジタル化が進んでいる状況で来館者が増えているのは興味深い点と言えよう。それは図書館の役割が多様化してきていることを示すものであるとも言える。単に本を借りるだけの場所ではなくあらゆる情報を取り出すためのツールを備えた場所であり、

さらにworkshopへの参加は情報リテラシー能力を引き上げる大事な役割を担っている。Berkeleyではworkshopへの参加は確認テストによるレベルチェックが行われ、希望するものに参加できるとは限らない。だが、予約により一対一のレファレンスを一時間受講することが可能である。特に学部生に対するきめの細かい指導が印象的であった。エキスパートとして図書館を理解してもらうための工夫努力があり、それを一任されている責任、そしてプライドを感じられた。

桜美林大学図書館でも一年のうち数回情報検索ガイダンスが実施されているが、参加者が大変少ない状況にある。研究に必要な大事な要素を見過ごしているようで残念でならない。Research Libraries Groupでは一日に一万件のアクセスがあるという。その数字が裏付けるように世界中のあらゆる機関や人々が様々な情報を求めている。

ここ桜美林大学でも近い将来多様なworkshopが発足し、沢山の参加者でにぎわう日が来ることを切望して止まない。まだ気付いていない情報資料が空間を越えて世界に存在していることを大いなる知的好奇心を持って是非見つけ出してほしい。



Research Libraries Groupのスタッフと研修参加者

朝陽門外の虹：門も塀も取り払って

閲覧係 金子由子



昨年、岩波書店から『朝陽門外の虹；崇貞女学校の人びと』が出版された。この本は、崇貞学園と桜美林学園の創立者・清水安三先生が、主に戦前、北京朝陽門外に於いて実践したキリスト教主義にもとづく婦女教育について、作家の山崎朋子さんが長年にわたる取材の末に上梓したものである。山崎氏は取材に十数年の歳月をかけて、清水安三先生の生い立ちから、二つの学園の創設に至るまでの、壮大な歴史を丹念に追っている。身近で教えを受けた私は、清水安三先生から折にふれ当時のことを部分的に聞いたことはあったが、この本を一気に読み終えて深く胸を打たれてしまった。

昨年夏、幸いにも、清水安三先生の足跡を訪ねる旅に参加する機会を得た。清水安三先生の生家跡、生涯に大きな影響を与えた中江藤樹記念館、ヴォーリズ先生関連施設、今津教会、美穂夫人生家跡、同志社大学等を訪ねた。清水安三先生は同志社を解雇されている。そのとき、人気のなくなった夜、大学の塀にぶらさがって泣いたことを、

何度か直接伺ったことを思い出し、同志社を訪れたときには感慨もひとしおであった。

桜美林学園には門も塀も垣根もない。昨今としては物騒な気もするが、しかしこのことについて、生前に清水安三先生が「来るものは拒まず」と自慢していた事が、まるで昨日のことのように思い出される。ある朝、礼拝に行くために急いでいた時、清水安三先生の銅像の前で、誰かに呼びとめられた。ふと見ると私のかつての権りつけの歯医者さんであった。「門も塀も垣根もない学園を見学に来ました。本当に何もないですね。それに、仕事に着く前に礼拝をもって一日の仕事を始めるとは、素晴らしい学園ですね」と褒められたことがある。

「垣根を作らず、隣人を愛し、国際人を育成する」これが清水安三先生の精神であり教育理念である。図書館にも所蔵されているので、新入生のみなさんにも是非一読をお薦めします。

(請求記号：289.1/Sh49/Y)

OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY OBIRIN

Q & A

質問コーナー

Q 今借りている本を続けて借りることはできますか？

A はい。一回だけ延長手続きをすることができます。延長したい資料を持ってカウンターに申し出るか、またはOPACから以下の方法で延長することができます。

1. OPACの初期画面にある「本人利用状況確認」をクリックしIDとパスワードを半角で入力して画面を表示。
2. 延長したい資料を選択し「貸出延長」ボタンをクリック。(延長手続きは一冊ずつ行ってください)
3. 再度、IDとパスワードを入力すると完了です。
【注意点】
 - ・未製本雑誌は延長できません。
 - ・予約が入っている場合や延滞・ペナルティ期間中は延長できません。
 - ・延長手続きは一回のみです。

Q 購入希望は出せますか？

A 本学図書館に所蔵されていない場合は、購入希望を出すことができます。図書は1人年間6冊まで、視聴覚資料は3点までです。各カウンターで申し込んで下さい。申し込みをしてから利用できるまでには、和書で約2~3週間かかります。

Q 借りた本をなくしてしまったのですがどうしたらいいでしょうか？

A すぐにカウンターに連絡してください。
現物弁償になります。

Q 還却が遅れてしまったのですがどうなりますか？

A 延滞した場合は、延滞日数だけ貸出停止になります。ご注意下さい。